

滋賀大学経済学部後援会だより

発行／彦根市馬場一丁目1-1 滋賀大学経済学部後援会 発行責任者／岩田守弘

目次	
経済学部の教育目標と方針 1	ゼミナール紹介 6
教育プログラムの紹介 3	教員の研究紹介 8
経済学部OB・OGの声 4	

**経済学部の
教育目標と方針**

経済学部長 梅澤直樹



後援会員の皆様には常日頃より本学部の教育に暖かいご支援を賜り厚く御礼申し上げます。国の財政事情が厳しいなか、私たちも知恵を絞って競争的プログラムに

応募し、現在も3つの特別予算を獲得するなど教育力向上に努めておりますが、学生の英会話力の強化を図る検定試験の受験料の一部のご支援など後援会のご助力によつて成り立っている事業もございます。今後ともご支援のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。

今回の後援会だよりでは、「①どのような学生を育てたいのか、そのためにどのような教育を行っているのか、学生時代に何が必要か、②グローバル化時代の国際化への対応、留学の仕組みや支援制度など」について寄稿を求められました。②については、武永副学部長が詳しい説明を寄稿させていただきますので、以下では①を中心に説明いたします。

本学部の特徴として「就職に強い大学」ということがしばしば言われます。実際、彦根高等商業学校以来の伝統があり、卒業生には日本でも有数の商社やメーカー、金融機関などの経営者として活躍された方が多数おられます。さらに、そうした先輩が後輩たちの就職活動に大きな助けとなつてくださつて、本学部はたしかに優れた就職実績を残してきました。いわゆる出世度という点でも本学部は実績を誇ることができません。そうした伝統を引き継ぎ、「高度専門職業人」を育成しようという教育目標は今も変わつておりません。そこで問題は、現代にふさわしい高度専門職業人とはどのような資質を備えた人材であるべきかということになります。

この点で注目すべきは、現代が非常に複雑で変化の激しい、これまでの常識に頼つてはなかなかうまく切り抜けてゆけない社会になっているということだと思います。現代の経済活動は国という枠組みをはるかに超えて地球規模で密接に絡み合いながら展開されるようになりなりました。そのなかで発展途上国の中から急速に経済力を身につけた国々が登場し、世界的な経済勢力図は大きく塗り替わりつつあります。また、そうした国々と厳しい競争を繰り広げる結果、非正規職につかざるをえない若者も激増しています。さらに、少子高齢化が急速に進んだ

り、地球環境問題が深まつて「望ましい社会」像が問い直されています。昨年の東日本大震災では、現代の科学技術力をもってしても自然災害を完全に封じ込めることはできない、現代人は自然に対して少し驕り高ぶり過ぎていたということを教えられました。これらは、経済のあり方だけではなく、社会のあり方、ひいては豊かさ、便利さを求めてこれまで疾走してきた私たちのライフスタイルをも変えてゆく必要があることを示唆していると言えるでしょう。つまり、私たちは時代の大きな転換点に差し掛かっているのではないかと思われるのです。

こうして、現代の高度専門職業人は、複雑で激しく揺れ動く現実のなかで直面する諸困難に対して、既存の常識にとらわれることなく柔軟な思考をもつて、「どこが問題点でどの方向に道を切り開いてゆけばいいのか」を自ら主体的に考えることができる人材でなければなりません。そのためには、確かな専門知識を身につけておくことが必要です。同時に、問題点を的確に見つけ出し、正しい展望を切り開くには幅広く総合的な知識に立脚したセンスが求められることとなります。さらに、世界の中で、また国内で、そして自然に対する姿勢においても、他の人々から一目置いてもらえるだけの見識をも備えておくべきでしょう。本学部が近年掲げてきた言葉を用い

ば、専門知識、問題意識、見識の『3つの識』を備えた高度専門職業人を育てることが現代社会の要請というわけです。

こうした3つの識を培うため、本学部では3層からなる教育を編成しています。まず、新入生全員に「現代経済学基礎」という科目を課し、経済学的思考法に慣れてもらいます。ついで、もう少し専門知識のレベルを高めたり、どのような職業に就いても必要な知識の習得をめざしたり、あるいは柔軟に幅広く経済や社会について思考することを誘おうとする経済学、経営学、簿記会計学、統計学、法学などの「コア科目」を一回生後期から二回生にかけて配置しています。そのうえで、学生が自らの関心に沿って選択しながら専門知識を高めるための「多彩な専門科目」と「専門演習」を用意しています。専門演習では、共通の問題関心を抱いた少人数の学生が指導教員の下に集って議論を交わしながら主体的に学習し、より高度に3つの識を磨きながら、各学生がそれぞれに積み重ねてきた学習の集大成として卒業論文を仕上げます。



1,000円でかつらぎら17お手頃ランチ JIMO JOB こんきくらぶ求人情報 79,490

プロジェクト科目「働き方探究プロジェクト2012秋放送業界に学ぶ」、学生達が実際に榊FMひこねコミュニティで4つの番組を企画・制作し、放送しました。写真は、[月刊]こんきくらぶ10月号の表紙(C)株式会社中広こんきくらぶ編集室プロジェクトの記事が巻頭特集で掲載されました。

城山三郎氏の小説の中に、採用試験で、蟻のように営々黙々と働く覚悟はあるか、トンボのように複眼で柔軟に思考できるかとも、お、君は人間でありう

るか」と問われる場面があります。本学部では最後の問いを「見識」と捉えたわけですが、究極的にはそうした人間力こそが現代の高度専門職業人に求められる力だと思えます。そしてそれは教室の中だけで培われるものではありません。大学時代はおそらく人生のなかでもっとも時間の自由がきく時代です。学生にはそうした利点を十分に活かしてくれることを望みます。目先の利益のみを追わず、ときには人生とは、生きるとはといったことについておおいに考え、悩んで欲しいし、そのためにおおいに古典を読み、友人と語り合い、町へ出て欲しいと思います。さらに、上記のような国際交流事業を活用して、友人を広く世界に、また飛び出す町を世界に求めてくれるような元気な学生が多く現れてくれることを願っています。

の多様な学科を備えていること、とくに文学部や法学部的講座を含んだ社会システム学科を備え、多彩な講義を提供していることは、大きな強みとなっています。また、それを活かすべく、学科間の垣根を低くして他学科の科目も容易に選択できるようにし、学際的に学習することを促しています。と同時に、雑多な科目をつまみ食いの受講した結果大学で何を身につけたのかがわからなくなったりしないように、各学生の描く将来像に適合した科目群を示したコースモデルを用意しています。さらに、「自ら主体的に考える」力の涵養を促すため、学生といっしょに町へ出て行って創意工夫をこらして学習するプロジェクト科目も開設しています。学生の自修環境を整えるという点では、ビデオやコンピュータを活用したり、くつろいだ

雰囲気でも友人と共同学習したりできる部屋も設けました。国際化への対応という点では、冒頭にも記しましたように、後援会のご助力を得て英会話力の強化に努めています。また、会話は話す内容を身につけていてこそ生きるものですから、世界を見すえた経済や経営の講義にも力を注いでいます。第二外国語も、フランス語、ドイツ語や中国語のほかスペイン語、ロシア語、ハンガールというように多彩に開設し、前4者には専任教員も配置して世界事情に広く通じることを促しています。



アクティブ・ラーニング・ラボ (Active Learning Labo 通称「ALL」) (校舎棟3階) 学生の自立的な学習を促し、学生が共に学びあう場として、パソコン、学習教材、映像設備などを備え、飲食もできる「カフェ的学習空間」として、学生のグループ学習、学習教材を使つての個人学習などに利用されています。

教育プログラム

英語力向上への取り組みについて

副学部長（総務・企画担当）

武永 淳

経済のグローバル化とともに様々な職場、職種で「英語」を使いこなす能力が求められるようになってきていることは皆さんもご承知のことと思います。いわゆる「受験英語」に対する反発から「話せる英語」教育がすすめられてきていますが、残念ながらその結果、文法等を理解し、英語を正確に読解する能力は従来より低下する傾向にあるといえます。このような状況の中で、制約された時間数の中で行われる大学での語学教育の基本は、やはり専門的な文章を理解できる能力を向上させることにありと考えています。しかし、それと同時にこれまでの英語教育の成果の上に、「実用的な英語」を使いこなせる能力も学生には、身につけてもらいたいとも考えています。そのためには学生自身に「学ぶ」努力をしてもらわなければなりません。経済学部では、その出発点として、まず自分の「英語能力」を把握してもらうため後援会のご協力をいただいて、9月に一回生全員にTOEIC-IPの試験を実施してきました。この試験は定着し、就活に備える上回生の受験者も増加して来たのですが、様々な受験の呼びかけにもかかわらず3割程度

の一回生が受験料を支払いながら受験を放棄するという状況が生じておりました。この点を改善すべく本年度は、英語教員とも話し合い、TOEIC-IP受験を秋学期英語授業の出席と位置づけることにいたしました。その結果、91.3%の一回生受験が確保できました。当然準備不足のまま受験するものも増えましたので、平均点は昨年度より若干落ちましたが、ほとんどの学生にとつて自己の英語力がどのレベルにあるかを客観的に把握できる状態となったことには重要な意義があります。

また、英語への関心を高めるため、昨年度試行的に実施していた「英語多読プログラム」を一回生全員に対して実施いたしました。語学力を高めるためのもっとも確実な方法は毎日その言語に接するということが、授業のみではそのような状況は作り出せません。現在学生にとつて外国語とりわけ英語に接する



TOEIC-IP試験を受験する学生たち



英語多読プログラム教材

機会は、授業以外にも非常に多く存在するのですが、本人が主体的に取り組まない限りその機会は生かせません。まして英語に苦手意識のある学生にとつてはなおさらです。「英語多読プログラム」は、「英会話基礎の授業の一環として「2万語を読む」という課題を全一回生に課すものです。外国人向け（移民向け）の英語教材としてイギリスなどで開発された本を図書館に2000冊備え付けました。これらの本には入門から中級までレベル分けがあり、学生が自分の力にあわせて選択できるようになっています。さらに選択のサポートにSA（学生アシスタント）も配置しました。読了後WBで質問に答えることにより「読んだ」ことが教員に確認されるようになっていきます。春学期における貸し出し件数は約6千件でしたので、ひとり10冊は読んでいる勘定となります。かなり優しい英文ですので、この課題をこなしたることによって直ちに英語力が強化されるというものではありませんが、辞書をほとんど利用することなく、

多くの英文を読むという経験を初年時にさせることにより、英語に対する抵抗感を低め、授業外でコンスタントに英文にふれる意欲を高めることが本プログラムの目的です。今後プログラムの効果を検証しつつ、その改善を図っていきたいと考えています。

最後に、TOEIC-IP試験の2回受験化についてご報告します。従来から上回生のTOEIC-IP受験を奨励して参りましたが、100名程度の受験にとどまっておりました。学部で検討の結果、大学における英語教育の効果の検証ともなりまた就職活動に入る直前の学生の自己分析に役立てられるよう、来年度入学者から三回生時にも9月に全員受験させることといたしました。費用は後援会のご支援もいただき、2回受験で3000円と低額に設定したいと考えております。

さきにもふれましたが、語学学習の王道はやはり毎日コツコツと学習を積み重ねることです。大学では、アクティブ・ラーニング・ラボをはじめとして自習教材、自習システムを数多く提供していますが、多くの学生がそれらを十分に活用できていないという状況にはまだ到達していません。自学自習の習慣を学生が身につけていくきっかけとなるよう大学が上記の取り組みを行っていることを、是非保護者の皆様にもご理解いただければと思います。

経済学部OB・OGの声

OBとして「彦根時代」

陵水会・理事長 戸田一雄

(元 松下電器産業(株)・副社長)



拝啓、こんにちは。私は戸田一雄と申します。今年6月から、滋賀大学経済学部のOB会組織「陵水会」の理事長に就任いたしました。皆様方のお子様

くお願いいたします。私は、滋賀大学・経済学部を昭和39年、東京オリンピックの年に卒業致しました。在学中はゼミで近代経済学を勉強いたしました。それ以上にクラブ活動に打ち込みました。クラブ名は「山岳部」。年100日以上の中暮らしが私たちの目標でした。そんなある日、京都大学から講師で見えた石川教授の講義を聴きました。講義の中で石川先生が熱く語られた言葉は「企業は社会の公器である」という言葉でした。当時の

学生の思いは「企業経営者は、己の私欲のために経営をするのだ」というのが共通認識でした。それだけにこの授業は、学ぶ学生にとって、衝撃的であり、私達は夜更けまで興奮してディスカッションをしました。私にとりましては、この日の授業が、学生時代の良い講義の中でも最も思い出に残る素晴らしいものだったと今でも思っています。

まさかその事を、真面目にそして必死に実践を試みている経営者がいるとは思いませんでした。ある日、偶然アルバイトのために訪れた松下電器で、オーナーが必死に「私達の会社は社会の公器だ。私たちは心を一つにして社会の発展に貢献せねばならない！」と従業員に語りかけていました。オーナーの名は「松下幸之助」。当時松下電器の会長でありました。これに応えるべ



(独)フランクフルト「松下電器の販売会社」にて (1979年)

く、会社の従業員が一団となり、努力する姿を見、私は改めて石川先生の言葉を思い、その実践に努力している松下電器という会社を一遍に好きになりました。そして、「僕もその一員になりたい！」と思い、アルバイトに精励し、アルバイト先の方々の推薦を頂き入社試験を受け、晴れて社員になったのです。松下電器には、以降42年余りお世話になりました。自分の人生の大半をこの会社と一緒に歩んだのです。全身全霊を傾けた松下時代です。

時々思います。「もし自分が彦根で学ばなかったら、石川先生のお話は聴けなかっただろうし、この学校で山岳部に出会わなければ、アルバイト先も違ったところになっただろう。その結果、全く別の会社に入っていたに違いない。

さすればこんなに頑張る自分は創れなかったに違いない。」また、「会社は社会の公器なり。人間が生きる最高の目的は、社会のお役にたつためにある。」と言うことを大切に、日々を暮らしています。

今年6月より、陵水会の仕事をお手伝いするようになり、多くのOBの方々にお会いする機会が増えました。そしてお一人お一人が実に素晴らしい人生を送って来られたことを率直に感じます。また、その素晴らしい人生の出発点が、彦根の学生時代の良き経験にあったということも共通しています。



松下電器AVC社社長 戸田一雄氏(右)とライカカメラ社CEO ハンス氏(左)デジタルカメラ分野の共業発表(2001年7月)

滋賀大学での充実した学業とクラブ活動、彦根という街、それらがその後の人生の大きな支えになってくれたからに違いないと感じます。

素晴らしい先輩方に加え、毎年、気力充実のフレッシュOBを私たち「陵水会」はお迎えます。皆で知恵を出し合い、OB全員の幸せと、母校の更なる発展に努力して行きたいと思えます。

明(2013)年、私たちは、彦根高商より滋賀大学経済学部が、栄えある創立90周年を迎えます。お互いにこれまでの歴史の輝きを喜び合うとともに、更なる発展のために、皆様方と共に努力を重ねて行きたいと思えます。

多くの知識と経験を培った大学時代

全日本空輸(株)客室乗務員 西田香織

(平成22年度経済学部経済学科卒業)

《自己紹介》私は平成22年度経済学部経済学科卒業生の西田香織と申します。現在、全日本空輸(株)で客室乗務員として働いています。



日々、お客様が快適に空の旅を行えるお手伝いを行っています。私達は飲み物などを配布するサービスもありますが、一番大きな役割は保安

要員です。入社後に行われる約2ヶ月間の訓練はほぼ保安に関するものでした。厳しい訓練の後、国内線に3年程乗務しました。そして半年前に国際線乗務の資格を取った為、現在は国内線・国際線共に乗務しています。客室乗務員という職業は世界各国の様々な方とお話出来ますし、仕事を通して女性としても成長出来る仕事だと思っています。まだまだ勉強中の身ですが、毎回のフライトで先輩方に様々な事を教えて頂きますし、向上心を持って仕事に臨む同期・先輩がいる事で自分自身も高められます。サービスにゴールが無い事を念頭に置いて、温かくスマートなサービスの出来る客室乗務員を目指しています。

《大学での日々》大学での私の目標は4年間を通して、多くの人の考えを知り、価値観を広げたいというものでした。その為多くの授業を履修する・海外へ行く機会を持つという事を意識していました。

授業に関しては、専攻に関係なく幅広く履修しました。毎日、先生方のお話が興味深く頻繁にメモを取っていました。大学時代ほど様々な方からお話を聞ける機会はないと思いますので、せっかく参加するならば主体的に学ぶ事をおすすめします。そして一回生、二回生の時には中国大連、オーストラリアメルボルンへの語学留学に参加しました。中国での3週間は、日本と全く違う環境を体験し、自分の周りの世界が如何に狭いかを実感しました。それと共に寮生活を通じて一生付き合っていく仲間も出来ました。留学をきっかけに中国語を勉強する楽しさを知り、大学4年間を通して勉強を続けていきました。今

思うと、それがきっかけで「目標に向かって突き進む」という私自身の土台が出来上がったのかもしれないですね。オーストラリアでは1ヶ月間ホームステイをさせて頂きながら語学学校で



石垣島にて

英語を学ぶ日々でした。メルボルンは非常に住みやすい街で、いつかまた訪れてみたいと思っています。

大学の語学研修プログラムは長期休暇の中で行われます。日本では出来ない様々な経験が出来ますし、それと共に自分自身を見つめ直すきっかけにもなると思います。迷っている方には勇気を出してぜひ参加して頂きたいです。

《在学生へのメッセージ》私から皆様へお伝えしたい事は、一つ目に、学生の内に多くの人の話を聞いて多くの経験をさせて頂きたいという事です。社会人になると様々な人と関わり多くの考えと接する事があり、その時に受け入れられる様に広い心を持つ事が重要です。その為には、多くの授業を履修しても良いと思いますし、部活動・サークルでも多くの仲間と接し、考えを深めたいと思います。また滋賀大学では多くの海外への留学が叶う環境がありますので積極的に参加する事もおすすめです。どの様な事を経験しても、社会人になった時に必



『ビール祭り』、(独)ミュンヘンにて

ず役に立つと思います。私は学生時代の短期留学を始め、経験した事全てが非常に役立っていると感じます。お客様とお話する時のきっかけの一つになりますし、中国語に関しても中国人のお客様が増える昨今勉強して良かったと感じます。

二つ目は、学生の内に健康を保つ方法を確立する事です。仕事を始めると自由には休めませんし社会人として体調管理は必要です。私の仕事は体力勝負なので、常にプロとして体調管理を行わなければなりません。欧米線の長いフライトでは乗務時間は12時間にも及ぶので休みの日はしっかりと睡眠をとって次のフライトに備えます。またステイ先で時間があ

る時は、ホテルのプールで泳いでリフレッシュすると共に体力を付ける様にしています。皆様にも自分に合った方法で体調を整える方法を確立して頂きたいと思っています。最後に、滋賀大学は自然の中であり、勉強に励むには大変良い環境だと思います。その中で、今しか出来ない体験をして下さい。その経験は必ず将来の進路を決める材料の一つになると思います。ぜひ悔いのない学生時代を過ごして下さい。

ゼミナール紹介

★ゼミナールとは

通常ゼミナール、略して「ゼミ」と呼んでいる授業は、経済学部の「演習Ⅰ」「演習Ⅱ」「演習Ⅲ」「演習Ⅳ」といった一連の4つの授業科目を意味します。これらの授業科目は、2回生の後半に各学生の選択希望に基づき、一部調整されますが、各学生の受講クラスが決定されます。その後、進級した3回生の春学期から授業が始まりますが、以後継続して受講され、4回生の秋学期までの4つのセメスター（つまり学期）で「Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」順番に履修されて行くことになっています。

こうした「ゼミ」の授業では、各教員がクラスを受け持ち、各クラスは数人の受講生から20名程の受講生で構成されることもありですが、平均では1クラス10名程となっています。また、ゼミのクラスは、3回生からの4つのセメスターを通じて学生が一貫して受講する同一のクラスです。ゼミのクラスは、同一の教員が担当の専門分野の学問的内容について受講生の学習ないし研究を指導することになっています。

3回生のゼミ「演習Ⅰ」と「演習Ⅱ」の授業では、一般には、まず専門分野の基礎的内容の理解を固め、次に

専門分野の展開的な内容や発展的な研究につなげて行くように指導されます。それらに続く4回生のゼミ「演習Ⅲ」と「演習Ⅳ」の授業では、専門分野の発展的な研究を深めながら、同時に2年間のゼミ指導の仕上げとしての「卒業論文」を目標として、この作成のための指導が行われます。このようにゼミ担当の各教員は「卒業論文」の完成までそのクラスの受講生を一貫して指導することになっています。

夜間主コースの学生にとっても昼間主コースで開講されているゼミは選択可能であり、夜間主コースの多くの学生（近年では8割程）が受講しています。しかし、夜間主コースでは昼間主コースのゼミが基本的に必修科目ではないので、そうしたゼミを選択しない場合でも、夜間主コースの開講科目である「課題研究」を選択することで、その担当教員の指導の下で、特定の専門的内容を課題として指定し、専門的に深めた形で研究することができます。「課題研究」の受講者は、昼間主コースのゼミを選択する学生が多いため、近年では少なくなっています。

ゼミは少数教育の授業科目ですが、クラスでの研究報告ないし発表を担当することで主体的な学力とプレゼン能力が養われます。また、クラス内での授業ごとの議論や共同研究、報告の準備作業、ゼミ受講生間の日常の交流などを通じて、論理面だけでなく総合的なコミュニケーション

ション能力や人間関係を形成する力も培われます。それゆえ、ゼミは大学4年間の後半に配置されている主要な授業科目であり、専門教育としてだけでなく、ゼミ担当教員が学生生活や進路の相談や指導を行うことで、学生指導の面からも総合的に重要な役割を果たしています。

金ゼミナール

貧困問題を考えるゼミ

開発途上国は飢餓や貧困、紛争および内戦、テロ、環境汚染、人身売買などさまざまな問題を抱えています。これらの問題が原因となっており、世界の平和が損なわれる可能性も十分あります。開発途上国には、経済開発が急速に進んでいる国・地域もあれば、未だに飢餓や貧困の問題さえ解決できない国・地域もたくさんあります。国際社会の平和と国・地域の相互繁栄のためには、開発途上国



研究発表を行う学生たち(右は金先生)

への国際協力は欠かせないものです。開発途上国を支援するためには、開発途上国が置かれている現状を正確に理解するとともに、先進国による政府開発援助や、国際機関が行っている公的援助を理解する必要があります。このゼミでは、開発途上国が抱えている諸問題や開発政策、開発理論などを理解したうえで、それを実際の問題に適用して解決策を探る機会を与えることを目標にしています。

途上国のために自分びきょうを考える

開発途上国にとって経済開発は必要なのか、必要であるならばどうすれば開発は軌道に乗るのか、また開発途上国の開発のために先進国や国際機関が行っている公的援助は必要なのかを経済理論に基づいて考えます。そしてゼミ生自ら国際交流やボランティア活動の計画を立てて開発途上国を訪れ、現地大学での学生交流や小学校でのボランティア活動などを行うなど、開発途上国が置かれている状況を直接自分の目で感じる機会を与えます。場合によっては、ゼミの教員と共に農村で農家をまわりながら家計調査などを行うこともあります。

ゼミ生の活動の紹介

ゼミ生が行っている活動を少し紹介します。開発途上国での学生交流やボランティア活動は毎年の夏休みに行っていますが、大勢のゼミ生が参加しています。3回生の春学期に



訪問先のラオス小学校にて

ボランティア活動の計画を立て、現地の大学や小学校のスタッフと連絡をとりながら詳細な活動計画を進めていきます。
現地での活動としてはこれまでに、ラオス国立大学で日本の自然災害を伝えたり、日本とラオスの食文化や大衆文化について相互発表をして討論を行ったりしました。ある私立大学では東日本大震災や原発について報告を行いました。その後教員や学生からたくさん質問や励ましという言葉ももらいました。またラオスの小学校では、日本の小学校で集めた、ラオスに寄贈するための文房具やサッカーボールなどを配ったり、環境に対する意識を向上させるため環境問題についての紙芝居をしたり、まちのごみを拾ったりしました。日本に関心の高いラオス大学の学生らとは観光地と一緒にまわった

ガチゼミ
滋賀大学には3大ガチゼミというのがある。学生がこんなことを口にするようになって久しい。ガチとは、いわゆるガチンコの略で、「真剣勝負」や「真面目」を意味する言葉らしい。とりわけ最もガチなゼミとして学生の間で知られている、そんな宮西ゼミについて、今回はそのエッセンスをご紹介します。
最先端の理論を駆使し、財務分析を極める
当ゼミナールでは、「国際性」、

親睦会をしたりして交流を深めます。こうした活動を通して知り合った現地の学生とは、日本に帰ってきてからも多くのゼミ生が連絡を取り合い、交流を続けています。秋学期からは開発途上国で得た経験や経済学知識を踏まえて秋に開催される西日本論文大会で発表する論文を作成します。このようにゼミ生が自主的に学び、さまざまなことに挑戦するゼミを目指して教員も学生も頑張っています。
ゼミ生の主な就職先
日本郵船、京都銀行、名古屋銀行、滋賀銀行、日本生命、積水ハウス、日本郵政、富士貿易、佐藤商事など。

宮西ゼミナール

「専門性」、「チーム力」をキーワードに、「生涯の財産となる能力」の涵養を目指しています。アメリカの「Kellogg」ビジネススクールでの研究経験をもとに、アカウンティングやファイナンス分野の最新の研究成果を応用して、企業の財務諸表から業績を分析し、企業価値を推定する研究に取り組んでいます。
1年目のゼミナールでは、企業の業績は優れているのか、新たな戦略プロジェクトの価値はどの程度あるのか、買収や合併のターゲット企業の価値はどれぐらいあるのか、などの問題について徹底して学んでいます。2年目は、卒業論文のテーマについて、主として英語でのプレゼンテーションやディスカッションに取り組んでいます。
きっかけ&チャレンジ
アメリカ留学を終えて日本に帰国し、本学のゼミナールでの教育に力を入れ始めてから、早いもので10年以上が経過しています。帰国当初、教育面で何か独自の貢献はできないか、滋賀大学の学生に還元できることとはないか、そんなことを考える中で、日本固有の優れた教育の仕組みであるゼミナール活動に、潜在的な可能性とブレイクスルーの機会を見出しました。
アメリカのビジネススクールのテキストは面白い。会計だけでなく、ファイナンスや戦略論、マイクロ経済学の議論だつて盛り込まれている。

実践への応用を徹底して意識している点が魅力的だ。そんなことを学生に語りながら、チームワークやグループ・プレゼンテーション、説明力を徹底して鍛えるコンセプトを掲げ、ゼミ生とともに試行錯誤を重ねながら、この10年間、着実に進化を遂げてきました。
目指すは世界
ここ数年は、新ゼミ生選抜の時期には50名程度の希望者と面談しています。そして、毎年10名から15名程度の学生がゼミに入っています。体育会で活躍する学生、留学や海外インターンシップに取り組む学生、専門性を追求する学生、そして、中国、ベトナム、フィリピン、メキシコ、マレーシアからの留学生、と実に多様でツワモノ揃いのメンバー構成となっています。
ゼミの卒業生もすでに150名を超えており、大半の卒業生が大手企業の財務経理で就職していることは、当ゼミのユニークな状況となっています。将来は、専門性を武器にしてグローバルに活躍したい、そんな



研究発表を行う学生 (右は宮西先生)



発表に対して質問する学生

な学生時代の夢に向かって、卒業生も日々躍進しています。

過去5年間のゼミ生主な内定先

「2012年度」 伊藤忠商事、丸紅、豊田通商、デンソー、東芝、住友電工、NTTデータ、アイシン精機、など。

「2011年度」 電通、味の素、本田技研工業、住友電工、日立製作所、東京海上日動、トヨタ紡織、クボタ、住友重機械工業、DIC、味の素製薬、など。

「2010年度」 豊田通商、クボタ、デンソー、旭硝子、信越化学、東芝、日東電工、太陽日酸、パナソニック、YKK、大日本住友製薬、いすゞ自動車、など。

「2009年度」 パナソニック、本田技研、NHK、東京海上日動、住

友金属鉱山、京都銀行、GSユアサ、など。

「2008年度」 JR西日本、三菱重工、日産自動車、パナソニック電工、サンヨー、資生堂、NEC、東洋ゴム、神戸製鋼、SBIホールディングス、など。

教員の研究紹介

「私の研究」

社会システム学科 大村啓喬

私の専門とする研究分野は、内戦研究です。大学時代の卒業論文をきっかけに内戦研究をスタートさせたので、かれこれ約10年間このテーマに付き合っていることになりました。

内戦は、私が専門とする政治学が分析対象とする政治的要素だけでなく、経済・社会・文化的要素が複雑に絡み合っています。また内戦時には、政府と反乱軍だけでなく、民族や軍閥、時には民衆が武器を持って戦い合います。また、内戦は人々の増悪だけでなく、富への欲望や平等への希求が複雑に入り組んだ現象だとも言えます。10年間取り組んできたにも関わらず、自分が研究の入り口に立ったばかりだと痛感するほど、問題の根が深いのが内戦研究ではないかと思っています。

内戦研究の中でも私が現在取り組

んでいるテーマは、「内戦後の秩序回復に関する研究」と「内戦と天然資源に関する研究」の2つになります。前者の課題は、内戦後に人々がどのようにならざるを得ないのかを構築するのを取り上げるものです。アフリカでの内戦の事例について考えてみると、一度終わったはずの内戦が再び発生していることが度々あります。そこで、内戦の再燃傾向の要因は何なのかというのを研究するのが、私の第一の研究課題です。内戦が再燃する理由は現在まで数多く考えられてきました。私が注目しているのが内戦の「終わり方」です。内戦の「発生」と「再燃」の最も大きな違いは、後者の場合は内戦を一度経験しているという点です。そして、どのような終わり方をした内戦が再燃しやすいのかを分析した結果、和平合意によって終結した内戦よりも一方的な軍事勝利によって終結した内戦の方が、その後長い平和が続く(再燃しにくい)ことがわかりました。長年戦ってきたグループが紙の上で平和を誓い合っても、お互いの戦力を残したままでは、不満や欲望次第で武器を取ってしまうという事です。

後者の研究では、世界に点在する天然資源の存在が内戦にどのように影響するのかというのを調べておられます。直観的には人々に幸せを生み出すように思われる天然資源が、実は人々に内戦という不幸をもたらしているのではないかというの

第二の課題における主要な問いかけです。天然資源は、内戦を起こすだけではなく、経済成長や民主化の邪魔をするとも言われています。天然資源が生み出す「呪い」を解く方法については、経済学者や政治学者が多くの提言をしています。私が注目するのは資源を管理する国際・国内制度です。天然資源が内戦に結びつくためには、内戦を起こす潜在的な反乱軍が、天然資源(富)を獲得したいと切望し、資源取引によって資金調達ができなければなりません。天然資源によって生まれた富を国全体に分配することができる国内制度があれば、潜在的な反乱軍の富への欲望は弱まるはず。また、反乱軍による資源取引を管理する国際的な制度を構築すれば、適正な取引ルールに乗らない違法な資源からは反乱活動に必要な資金を得ることができなくなり得ます。国際・国内制度の構築によって、天然資源は、人々に呪いではなく恩恵を与えてくれるはず。

研究活動に集中していると家族サービスが疎かになってしまうので、毎週末とはいきませんが、時間の空いた週末には必ず家族3人で滋賀県の名所を回っています。滋賀県内には「戦(いくさ)」に関連した重要な場所が多々あるため、現在起こっている世界各国の内戦についても、過去に日本で行った「戦」から多くのヒントを得ることができているように思います。